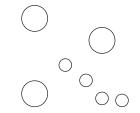
総論

AIを多面的に考える

- 1. 人工知能と共に生きる 市川 嘉裕
- 2. AI を正しく理解し、利用していくために 工藤 郁子



AI(Artificial Intelligence)といわれる人工知能は、現代社会において様々な場面で使用されている。例えば私たちの身近なところでは、スマートフォンにおけるAI機能が挙げられる。スマートフォンの使用者の行動パターンや好み等を分析して予測を立て、使用者に適したアプリの提案や情報の提供が行われている。また「お掃除ロボット」といわれるように、機械に内蔵されたセンサーによって家の中の間取りを学習しながら、障害物にぶつからず掃除を行うといったことにもAI技術が使用されている。

これら AI の技術は、「便利」で「楽」で「手間」がかからないということが良い面として主張される場合が多い。しかし一方で、筆者がある AI の専門家から話を聞いた時に「AI は融通が利きません」と述べられていたのがとても印象的であった。AI は大きな力を発揮する一方で、最初の「入力」を間違えた後に、相手を慮ることや、心配して配慮したりすることや、物事を転じて考えみるといったことを、状況や必要に応じて行うことは難しいといえる。

また AI が様々な仕事を代行することによって、生産性が上がること(= 人件

費等のカット)が大きなメリットとされているが、仮にありとあらゆるところでAIが導入され、生産性を上げることが達成されれば、短期的には利益等が出たとしても、長期的には社会の中に失業者や貧困者があふれ、購買力そのものが失われるため、様々な事柄が縮小していくことが予想できる。

大事なのは AI をはじめとする様々な情報関連技術を使用する意味を十分に考え、それらに過度に頼り、安易に取り入れるだけではなく、どのように向き合っていくかということを、私たちが当事者意識と想像力を持って、行動していくことではないだろうか。

総論ではこうした AI について考える 企画として、市川嘉裕氏には人口知能の 発展の経緯とその仕組みや課題につい て、工藤郁子氏には AI の技術に対して 人々や社会はどのように向き合えば良い のかということについて、多様な観点か ら述べて頂いた。本号を通じて、今後よ り生活の中での接点が増えてくるであろ う AI について考え、日々の中で行動し ていくきっかけとなれば幸甚である。

(本研究所研究員 片上 敏喜)